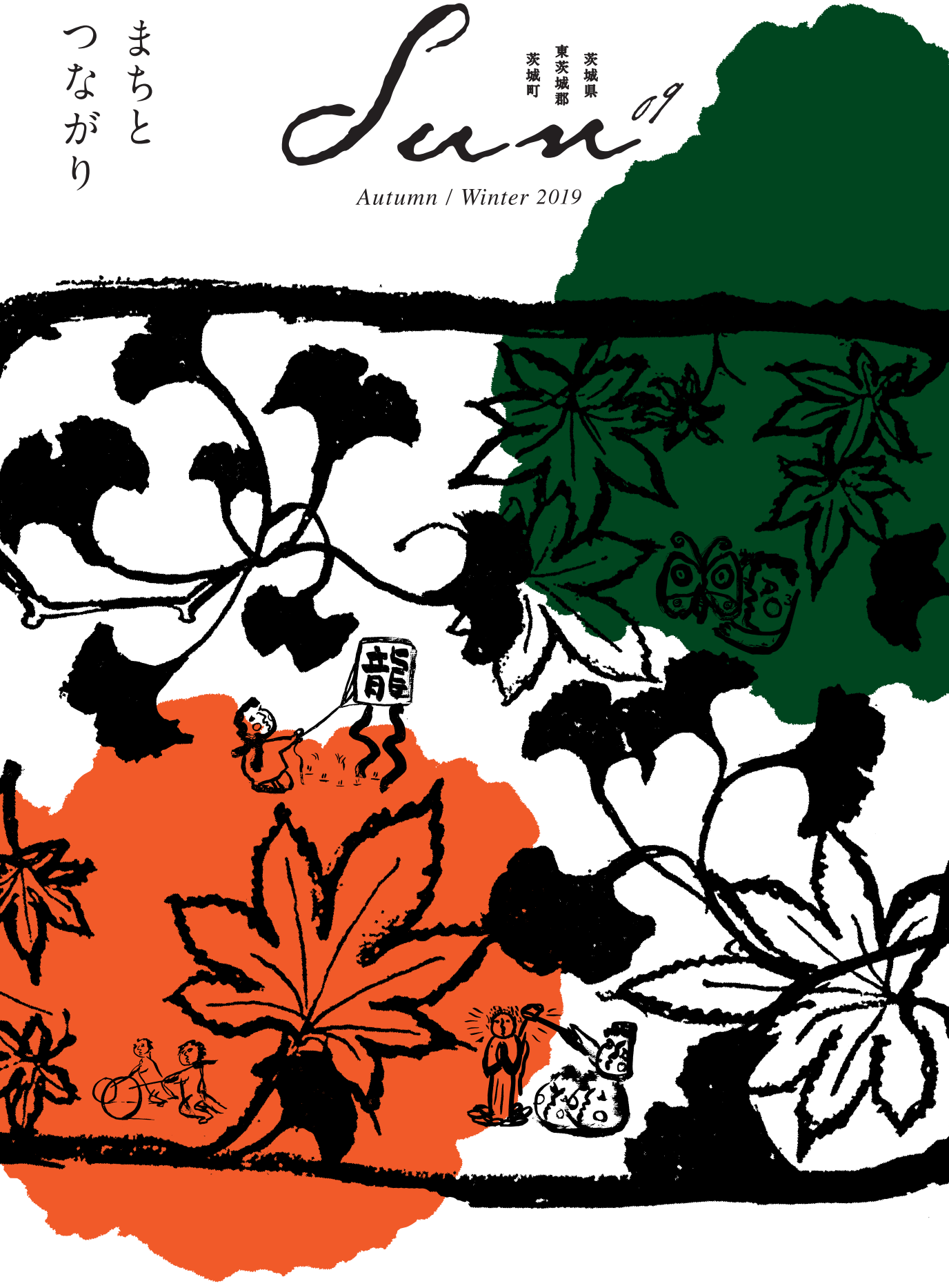
Sun 09

茨城県
東茨城郡
茨城町

Autumn / Winter 2019

まちとつながり



暮秋（ぼしゅう）　日脚より短く　落暉（らっき）　地を包む

童の許（もと）に　長い影法師が落ちる

冬隣　鴉声（からすごえ）響く中　過ぎた季を想い

地の歩みを振り返り　長日月（ちょうじつげつ）の跡を見附る

Sunは　茨城町と　ゆるやかにつながる　いくつもの縁を

人々の暮らし　情景と共に　綴り伝えていきます

撮影場所:下雨ヶ谷地区

Sun 09

茨城県
東茨城郡
茨城町

Autumn / Winter 2019

Contents　目次

03 特集一郷ノ知（さとのち）
更科公護の足跡を辿って

07 先生の跡を尋ねる
下土師地区を歩く

09 父の記憶
野澤由紀子さん

10 一人の民俗研究家が残したもの

11 まちで暮らす人 まちを想う人

17 連載　マチのケシキ

18 編集室から

Cover／
更科公護さんが描いた
挿絵を用いて秋の賑わいを表現。
紅葉や銀杏の葉を
大胆なタッチで描いていて
きっと童心のように
筆を走らせたのかもしれません。

特集

郷ノ知

更科公護の足跡を辿って

一九四八年、戦後の混迷期
一人の男が
茨城町にやって来た。
町に深々と根を下ろし
民俗研究に没頭した
その先に見たものとは。

構成―石川聖太
文―二川ナオミ
写真―アラタケンジ

茨城町に来たのを第二の人生として
ひたすら郷土の研究に専心し
これに生きがいを得たからであります

このたび一身上の都合で娘のいる
ブラジルへ永住することになりました
あと数日で私は皆さんと
お別れしなければなりません
どうか茨城町のため　皆さんの力で
われわれの祖先が残した生活のあとを探究し
美しい自然を保護してうるおいのある
楽しい町を築き上げてください
私もブラジルへ行って
新しい第三の人生を築くつもりでおります

『茨城町と私の郷土研究 更科公護氏の業績』

今から約四〇年前、一人の民俗研究家がこの町を去る際にその業績をまとめた小さな冊子が贈られました。『茨城町と私の郷土研究 更科公護氏の業績』というその冊子の冒頭に残されていたのは、更科氏本人が残した先の言葉でした。行間から彼の想いが滲みでているかのようなこの言葉は、今回の特集［郷ノ知］を制作する動機となりました。

一九〇六年、北海道小樽生まれの東京育ち。電気通信技師をしていた彼は戦後間もなく東京を離れ、旧川根村下土師（しもはじ）へとやって来ました。地域のいたるところに残された土器や石器などの遺物を集め、古老の話に耳を傾けるうちに民族研究にのめり込んでいったようです。

昭和二〇年代後半から五〇年代前半までを茨城町で過ごした更科氏は、狐火や盆綱の研究をはじめとし、動植物や子どもの遊びなど幅広い研究実績を残しました。

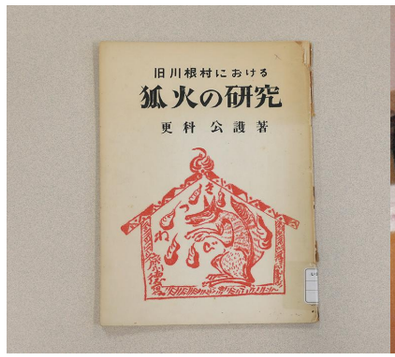
僅かながら残された資料と、ゆかりのある人物や場所を手がかりに、更科公護という人物像と彼が民俗研究を通して伝えたかった想いについて考えてみたいと思います。

暮らしぶりと研究

『茨城町史・地誌編』によると、更科氏が暮らしていた旧川根村下土師は「古代において土師（はじ）部集団がこの一帯に居住していたことが推測される」土地なのだそうです。土師部という古墳時代に土器や埴輪などの土師（はじき）器を作っていた人々のことを指す言葉がありますが、下土師もそうした古代の遺物が多く出土する場所のようで、農業の邪魔になる石器や土器が石に混ざって一箇所に集められていました。畑と畑の境界線に植えられたウツギの下にあることが多かったのだそうです。更科氏も五万分の一の地図を片手に、石鏃や石斧を採集していたのだと冊子の中で語っています。そうして収集された古代の遺物はその後、地元の子どもたちの教材にと川根中学校へ全て寄贈されました。

更科氏が本格的に民俗学的研究に没頭する転機となったのは、狐火の話に興味を持ったことからでした。涸沼川沿岸には狐火の話が数多く残りますが、これに着目した更科氏は地元の古老を訪ねては熱心にあれこれと話を聞いて歩いたのだそうです。その成果は昭和二七年に出版された『旧川根村における狐火の研究』という冊子にまとめられています。地道な調査内容が丁寧に書かれているだけでなく、狐火のメカニズムに関する科学的な分析と考察までなされている内容からは、執念ともいえるような情熱が感じられます。

また、昭和二九年には、下土師にあった慈雲寺の和尚に依頼され、寺の沿革をまとめた『慈雲寺沿革』の編集を手がけるなどしており、次第に地元でもその活動が認知されていくようになりました。昭和三〇年二月、長岡村、川根村、上野合村、鹿島郡沼前村が合併し東茨城郡茨城町が誕生するころには、彼の評判はある人物の耳にも届くようになっていたようです。



当時、研究一筋で暮らしていた更科氏の元を訪れたのは初代町長雨谷俊夫氏。町長直々に役場職員に是非、と頼み込んだという話ですが、彼はこの申し出を断ったのだとか。研究生活は決して楽なものではなかったようですが、町長の申し出を断ってまでも生きがいに注力するとは根っからの学者肌だったようです。

昭和三〇年代以降、県の古墳調査や町の社会教育委員、文化財審議委員など数々の調査や委員会に招集、委嘱されるようになります。また、動植物にも関心があった更科氏は「ギンタイカタハダアズマネザサ」と呼ばれる笹の珍種を発見し、昭和三一年の新聞にも掲載されています。アズマネザサはその後、町の天然記念物に指定されています。

昭和三八年には藤田稔氏など県内の有名な民俗学者らが茨城民俗学会を発足すると、その会員として県内各地の研究調査にも加わるようになり、田植えに関連する習俗や茨城町に残る盆綱など、さらに研究の対象と活躍の場を広げるようになりました。

更科氏によって、それまで記録される事なく継承あるいは淘汰されていた自然や人々の営みに少しずつ光が当てられ、その価値や重要性について多くの人が知るきっかけとなった事でしょう。数多くの研究業績を残した更科氏ですが、その素顔はどのような人物だったのでしょうか。更科氏と交流のあった二人の人物にお会いする事ができました。

昔話はある目的のために作られたもので民話は語り継がれ、常に新しく生まれ変わるものである

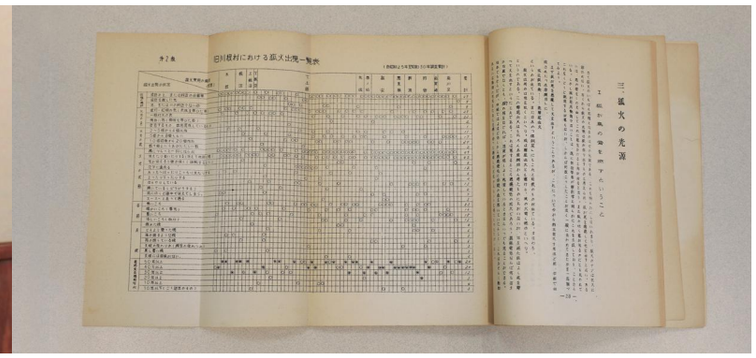
――茨城の民俗　第一九号　わたくしと民俗学　より

おらがの先生、更科さん

下土師に住む旭真一郎さんは昭和三〇年代、地元の青年会仲間と共に「下土師文化クラブ」を結成し、地域の行事や個々のエッセイなどをまとめた「つくばね」という機関紙を発行していました。その際、更科氏に編集の指導をお願いしていたのだそうです。当時の印象や思い出について教えていただきました。

（写真を見ながら）「ああ、この人だ、懐かしいねえ…更科さんはね、物腰が柔らかくて話しやすい人でしたよ。身綺麗にしていて、当時としてはお洒落な方だったと思います。自分たちでも知らないような地元の話をたくさん知っていて、いろいろと教えてくれました。よく「先の事を読みなさい」と言っていましたね。誰もやらない事をやりなさいと。非常に勉強になりました。私たちにとって先生のような人でした」。食料不足の時代、メンバー各々の家で作ったまんじゅうや野菜などを持ち寄り、更科氏の自宅に集まっては編集の指導を受け、話をしていたのだそうです。一人暮らしで寂しかったのか、更科氏も快く彼らを家に迎え入れ、六年ほどにわたり「つくばね」の制作指導を行っていたのだとか。「そういえば、更科先生の家はね、藁葺きで。藁は三年かそこらで葺き替えが必要なんだけど、それを仲間のみんなでやったりしましたね。藁を出し合って、人を頼んで屋根を直したの。何回かやったなあ」。

この地にやってきた更科氏は頼れる人も少なく大変だったようですが、地元の青年や、彼に一目置いていた人々に温かく見守られながら、持ちつ持たれつなんとか暮らしていたようです。



更科さんを送る

「更科さんはね、きちんとした人でしたよ。委員会の時には必ずネクタイを締めてきて。普段は物静かな人ですが、自分の意見はなかなか曲げない人でね。学者肌といいますか。委員会では熱く議論していました。私の興味がある江戸時代の貨幣について意見した時には、「若造が…」とよく言われたものです。今でも思い出しますよ(笑)」と、この特集のきっかけとなった『茨城町と私の郷土研究 更科公護氏の業績』を編集し、更科氏と共に文化財保護審議委員会で活動した林洋市氏は当時の印象と思い出を語ってくださいました。

「相当な業績を残した人ですから、町を発つ前に業績をまとめて後世に残すべきだと思ったのです。一〇〇冊でも二〇〇冊でも、冊子にして残せば、いずれその何冊かは後世に残るでしょう?皆に話したら賛同してくれたので、作ることができました」。林さんによると、ブラジルに渡る前、更科氏の自宅には多くの調査資料があったのだそうです。それらの一部が更科さん自らの手で焼却処分されていると聞き、慌てて譲り受けに行ったのだと言います。

更科さんとの思い出を語りながら、譲り受けた直筆のメモ書きや、冊子、ブラジルに渡ってから受け取ったエアメールなどを見せてくださいました。細かく整った筆跡から彼の真面目で几帳面な性格と息づかいが伝わってくるかのようでした。

先生の跡を尋ねる

下土師地区を歩く

虫の音が遠く静かに響く十月中旬。
下土師文化クラブで更科氏の指導を受けていた旭さんに
下土師地区を案内していただきました。
一緒に来てくださったのは「茨城町の歴史を語る会」会長の青山さん。
車に乗り込み、更科氏が暮らした集落へと向かいます。

旭真一郎さん（左）と青山和行さん（右）

先生が暮らした場所

水田を抜け、台地に上がり細い道に入ると、いたるところに栗畑が広がっています。迷路のような生活道路を進み、一軒の家の庭先に車を停めました。

「ちょっと待っていてくださいね」と言って旭さんが車を降り、家主の方に事情を説明してくださいました。かつてこちらの家の裏手に更科氏の自宅と畑があったのだそうです。二間ほどの小さな家で、時々、近所の家へ風呂を借りに行く事もあったのだとか。少しばかりの麦や野菜を作っていたようですが、その暮らしぶりはかなり質素だったと言います。更科氏の妻子が数年後東京へと戻ってからも、彼は一人、この地に残り研究を続けました。下土師の畑には今も境界線にウツギの木がポツポツと植えられています。

近くに更科氏ゆかりの寺である慈雲寺があるというので、そちらにも足を運ぶ事にしました。

蘇る当時の思い出

道は車で入れそうもありません。徒歩で向かうため、近くの家に車を停めさせていただく事にしました。

「すいません、こちらに車を少しの間停めさせていただいてよろしいですか？」家主の男性に慈雲寺に来た訳を説明すると、「どうぞ、どうぞ」と快く承諾してくださいました。「昔はね、あそこのお寺でもいろいろな行事があったんですよ。当時檀家が十軒あるかないかだったので、人を集めるために当時の和尚がいろいろと頑張っていました。お釈迦様にお茶をかける花祭りだとか、他にもたくさん行事があって賑やかでしたよ」と、その方は教えてくださいました。しばし、昔の思い出に花が咲き、記憶を辿る瞳の奥には当時の風景が広がっているかのようでした。更科氏にいろいろ語った古老たちも、同じように自分たちの記憶を生き生きと語っていたのかもしれません。車を停めさせていただき、寺へと向かいます。

かつて更科氏が暮らした場所は現在は畑になっていた

古寺に残る面影

慈雲寺の脇には小さな川が流れ、少し湿った草の合間を蛇が静かに通り過ぎて行きました。

寺の入り口には池があり、中央に浮かぶ小さな島にはお堂が立っています。入り口正面に見える建物には、数十年前には住職が住んでおり、草木も綺麗に手入れされとても見事だったのだとか。昭和三〇年代、旭さんが青年会に所属していたころは農家が多く、地域の行事も盛んに行われており、慈雲寺の広場を借りて盆踊り大会なども開催していたのだと教えてくれました。

奥へ入ると木々の合間から二階建ての建物がこちらを見下ろしてます。穢跡金剛堂（えぜきこんごうどう）と呼ばれるこの建物は『慈雲寺沿革』によると一八一〇年に建てられたのだそうで、茨城町の指定文化財にもなっています。この寺には一本歯の高下駄を履いて重い鉄棒を持ち歩き、遠い距離をあっという間に行き来してしまう「天狗和尚」の伝説も残っています。昔は裏手の山に大きな桜の木もあり、とても美しかったのだとか。寺が背負う山の木々を見ると、季節を勘違いした桜の古木が小さな花をつけていました。今はひっそりとしているこの寺も、かつては地域の憩いの場であり、様々な人間模様の舞台となっていたのでしょう。

先生の跡を尋ねて

更科氏ゆかりの地をめぐり、ポツポツと蘇る記憶から、彼が歩き回っていた当時の下土師の様子を少し伺う事ができました。もしかするとそれまで記録されることなく消えていった人々の営みの中に、故郷の奥深さ、その根源と価値を、更科氏は見出していたのかもしれません。

消えゆく記憶を後世に伝えるべく記録に残し続ける事に、使命のような生きがいを感じていたのでしょう。かつて彼が歩いた下土師の道を歩くお二人の背中を見ながら、そんな事を考えました。

父の記憶

取材を進める中で、更科氏の長女である
野澤（旧姓 更科）由紀子さんにお話を聞くことができました

私は一九四五年、当時九歳のころ、母と共に茨城町へとやってきました。途中、山手線の沿線が空襲で燃えているのを目にした記憶もあります。母方の血筋は水戸にゆかりのある家だったようですが、茨城には特別親戚がいたわけではありませんでした。東京の家で家事見習いをしていた方を頼って下土師へ疎開したのだと記憶しています。

父が下土師に来たのはそれから三年後の一九四八年の事でした。終戦直後ですから仕事もありませんでしたし、時々ラジオを修理するくらいなので、母の琴なども売ってしまうようなタケノコ生活でしたよ。私は川根小学校に六年生まで通い、その後大成の中等部を卒業して、進学のために東京へと戻ると、後を追って母と妹も東京へ来てしまって、父はそれからずっと一人でした。

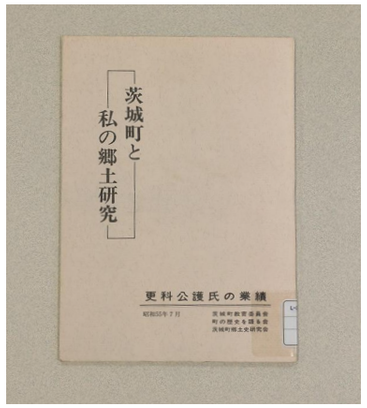
父は寡黙で温厚な人でした。大きな声を出すのを見た事も聞いた事もありません。理由は分かりませんが商業系の高校を中退していたので、特別何か専門的な教育を受けたわけではなかったようですが、とても勉強熱心で、物知りで、自分の興味のある事は全て独学で覚える人でしたよ。東京で勤めていた富士通信機でも技術課にいたくらいでしたから。若いころから草花や土器、鏃（やじり）などを集めるのが趣味だったので、棚を作って綺麗に並べていたのを今でも覚えています。東京にいたころは武蔵野を歩き回るのが好きで、私もよく連れて行かれましたね。そういう人でしたので、民俗学にも自然と興味を持って打ち込むようになったのだと思っています。

茨城の方々はお話好きな人が多かったですから、囲炉裏を囲んで父にいろんな事を話していたのでしょう。私たちが東京に戻ってからは茨城民俗学会にも入っていたようで、その方たちとの写真も何枚か残っています。

夫が大学を出てすぐに結婚し、ブラジルへ渡ったのですけれども、親戚もいない茨城町で一人暮らしの父の事はずっと気になっていました。いよいよ心配だったので、私たちの住むブラジルに呼びました。しかし、言葉も分からず、仕事もなく、行くところもなく、嫌だったのでしょうね。父は一年ほどで日本へ帰国してしまいました。八〇年代のブラジルはインフレが激しく、その間、日本はどんどん豊かになっていきましたから、今では帰国してよかったのではないかと思います。その後は知り合いを頼りに水戸のホームへと入所し、晩年は茨城町にある施設でひっそりと息を引き取りました。

1980年、父の友人家族と（右から2番目が野澤さん）

野澤さんはサンパウロ郊外在住。地球の裏側へネット回線で繋ぎ、お話を聞きました。



一人の民俗研究家が残したもの

何かの縁に引き寄せられるようにこの土地へとやって来た更科氏は、それから約四〇年もの間、土器や石器などの遺物、伝説や民話、時代の変化と共に消えゆく土地の習俗、動植物などを調べては記録し続けました。現在、町の指定文化財の中には、更科氏の研究業績によってその歴史的、文化的価値が明らかとなり、指定されたものが数多くあります。町の歴史をまとめた町史も旧川根村の記述に関し、その大部分を更科氏の調査記録を資料として用いたとも聞いています。

更科氏は民俗学的視点から、「当たり前」だと思っていた日々の暮らしに焦点を当てる事で、人々にその価値や重要性を伝えたかったのでしょう。私たちの「当たり前」というのは地域ならではの自然条件や歴史を背景に、その土地で代々暮らしてきた人々の様々な思いや考えが絡まり合い、地域の文化として残っているのだという事を示したかったのかもしれません。

「あなたの故郷には何がありますか」と聞かれたらあなたは何とこたえますか。自分たちの故郷について掘り下げて「知る」事はこの場所ならではという「地域らしさ」を再発見する事でもあり、その作業から学べる事は決して少なくないはずです。必ず何かがあるはずなのです。郷土の歴史や文化を知る事、言うならばそれを「郷ノ知」として今日の環境に当てはめて捉え直し、育み、財産として次世代に継承していく事が重要なのだと思います。そしてそれは更科氏が残した「美しい自然を保護してうるおいのある楽しい町を」という言葉の意味するところであり、これからのまちづくりに欠かすことのできない視点なのではないでしょうか。

まちで暮らす人 まちを想う人

写真 ―アラタケンジ　文 ―ホシカワリエコ

つくることで つながる

まちで暮らす人
パティスリー志粋 洋菓子職人　原田良介

Feeling & Thinking

Connect to Making

海と共に育った幼少期

私は茨城県の大洗町という港町で生まれました。両親は代々漁師と大工の家系です。母が海の家で働いていたため、赤ちゃんのころから海でたくさんのお客さんに接していました。物心ついたときには、お客さんに歌を披露しておひねりをもらったり、一人で勝手に海で貝を焼いて遊んだり。人見知りや物怖じをしない、わんぱくな子どもでした。小学校にあがってからも学校帰りに海へ寄って遊び、日が暮れたら家に帰るような生活で、大好きな海と共に過ごす日々を送っていました。

その後、小学校二年生のときに両親が離婚しました。母はそれ以来働きづめでしたので、そのころから自分でご飯をつくりはじめるなど、自立心が芽生えるのは早いほうだったと思います。

多忙だった母とのお菓子づくり

六歳のときに利益目的でお菓子づくりをはじめました(笑)。姉がバレンタインのチョコレートをみんなに配り、それが何倍にもなって返ってくるのを見たのがきっかけです。

それから母にお菓子づくりの本を買ってもらいました。お菓子をつくりたいと言うと、その間は母と一緒にいることができたので、休みの日に母と約束をして。お菓子づくりは多忙だった母との唯一のコミュニケーションの時間でした。

当時は男の子がお菓子づくりをするというのはあまりなかった時代。男の子は将来野球選手になりたいと言っている中、私の夢はケーキ屋さん。恥ずかしくてみんなには言えず、料理屋さんになると言っていました。

つながりが導いてくれた縁

中学生になると、世の中は鎧塚さんや辻口さんなどのパティシエブーム。時代が変わり将来はパティシエになると堂々と言いはじめていました。このころ、母の知り合いにパティシエを紹介してもらい、本格的なケーキをづくりを見せてもらうことになりました。家庭の電子レンジでつくれるようにと講習会を開いてくれて。その後定期的にいろいろなケーキ屋さんに連れて行ってもらい、厨房を見学させてもらうなど、貴重な経験をさせてくれました。

高校は食品化学科でパティシエになりたいという人が周りにいるような環境。将来をはっきりと意識しはじめました。

高校二年生のとき、東京の飲食店の方とお会いすることになり、その方にパティシエになりたいという話をしたら、自分の知っているところを紹介してあげると言われました。東京の北区十条にある有名な洋菓子店でした。シェフにお会いすると、パワフルでとても惹かれるものがありました。しかし当時すでに一人採用が決まっていて、採る気はないと言われてしまって。それでも諦めきれずに「ここで働きたいんです、ここしかないんです」と、シェフに何度も手紙を書き続けました。

高校三年生の冬、周りはすでに就職先が決まり、自分はパティシエになれるのかと不安な気持ちで過ごしていると、突然シェフから連絡がありました。「好きなときに来ていいよ、待っているから」と言われ、もう嬉しくて嬉しくて…。

事故と挫折　新たな決意

希望が叶い、職場にも慣れ仕事も楽しくなってきたころ、大きな交通事故に遭いました。首を痛めベッドの上で安静の日々。手術を経て退院し、一度職場に復帰するも、後遺症でケーキづくりはできないと病院の先生に言われ…夢を諦めることになってしまいました。憔悴しきった心と体を休めるため、しばらく茨城の実家に戻りました。その後、地元で首に負担のないアルバイトをはじめ、震災復興のための作業員として仕事をするうちに筋肉がつき、首回りが太くなりました。ケーキづくりの現場から離れて約三年、この体ならケーキをつくれるかもしれないと、再度パティシエを目指しました。

迷惑をかけたお店には戻れないので新たなお店を探し、シェフ自らが美しいケーキを手がける上、厳しいことで有名なお店の採用試験を受け合格。復帰をしたものの、グラス磨きやトイレ掃除などケーキと関係のない雑用の日々。それでもシェフの姿勢を間近で見ることができるということに満足してしまっていたんです。「お前、ケーキをつくりに来ているんだろう、ケーキもつくらず何年いるつもりだ」とシェフに怒鳴られ、あぁ自分は間違っていた…と目が覚めました。

しばらくすると兄弟子から「岩手にお店を出すから手伝ってくれないか」と連絡がありました。はじめて上京したときの職場の兄弟子は、途中で夢を諦めることになった私を気にかけ、定期的に連絡をくれていたんです。「パティシエになりたいのなら、お前の足りない部分は三年で教える、面倒を見るから」と。流れに逆らわず必要とされるところに行こうと心を決め、独立を視野に入れ岩手に行き、自分に足りないところを補うために勉強をしました。

茨城町にお店を構えて

お店は茨城に出すと決めていました。大工である実父に協力してもらいながら、さまざまな場所を見て回り、家族と長い時間を過ごせるようにと二階を自宅とする店舗兼住宅を桜の郷地区に建てました。そして今年の五月、洋菓子店〝パティスリー志粋〟を開きました。

この場所を選んだのは、古い団地と新しい団地が隣同士にあり、昔ながらの人付き合いがある一方、新しいものも受け入れられやすい環境で、幅広い世代に認知されやすいかなと思ったからです。暮らしてみると人のつながりがあるなと感じました。「お隣さんに聞いて来ました」「お店のチラシがあったら配るわよ」などと声をかけてくれます。小さい子が騒いでいるとうるさいと言われることが多い中「元気だね、一緒に遊ぼうか」と子どもたちの面倒を見てくれるんです。

また、お役所は一般的に融通がきかないイメージがありますが、初めて茨城町役場に相談に行ったとき、どの課でも無理ですとは言われず「できるか試してみます」と言ってくれました。決まりごとだけでなく個人の気持ちを乗せてくれるというか、温かみがあるなと感じました。

洋菓子店って少し入りにくい雰囲気かもしれませんが、うちはどろどろの作業着を着たおじさんも買いに来てくれるんです。かたくなく、町のお菓子屋さんのように接してもらえたらと思っています。妻と二人ではじめたばかりですが、いずれは「ここのケーキで育ったんだよ」と言ってもらえるような、町の老舗になれたらと思っています。

原田良介（はらだりょうすけ）　洋菓子職人　1989年茨城県大洗町生まれ、茨城町大戸在住。
2019年にパティスリー志粋を開店。
茨城町大戸3312-15　　instagram @patisserieshisui

表現と共に生きる

まちを想う人
画家　遅野井梨絵

文＝川ナオミ

Expression and attire

お囃子が聞こえた子ども時代

私は三人兄妹の末っ子。上に兄が二人います。獅子頭の彫刻師である父は、茨城町小鶴地区のお囃子保存会に入っていたので、家族全員でお囃子を披露するような、伝統芸能がそばにある家庭で育ちました。物心がつきはじめる三歳くらいからお囃子をはじめ、太鼓を叩きおかめの面をかぶり、お祭りや結婚式、地域のイベントなどさまざまな場所で演奏や踊りを披露していました。

お囃子以外でも、トミショウランドと呼ばれていた近所の空き地で友達と遊び、子供会のミニバスケットボールをやったりと、それなりに子どもらしく過ごしていました。将来の夢は漫画家かお菓子屋さんになりたいと思っていて、中でも絵を描くことが好きで、少女漫画を真似した絵をよく描いていました。

リアルイラストレーションとの出会い

高校卒業後の進路を考える中、それまでずっと絵を描き続けていたこともあり、より本格的に絵の勉強ができる都内の専門学校へ進学しました。入学した学校は、自己表現を形にすることを大切にする校風で、当時の先生から「あなたは人に絵を教わるより、自分の感覚で絵を描いていったほうがいい」と言われたのを覚えています。そんな自由な校風のせいか、個性的な人がたくさんいる楽しい場所でした。都内で暮らすことはせず、片道三時間ほどかけ実家から通い、学科はイラストレーション専攻で課題漬けの日々。なかなか大変でしたが、自分で選ぶのとは違ったものを描くことはいい勉強になったと思います。

当時は美人画をモチーフとした絵を多く描いていましたが、リアルイラストレーションの世界で活躍する先生の授業で、先生の緻密な作風に影響され、リアルな絵を描きたいと思うようになりました。サブカルチャー的なものに興味が出てきたのもこのころで、単館上映のマイナーな映画やテレビの深夜番組などに出演している俳優を多く描くようになりました。

宇宙の欠片

創り続ける覚悟

通っていた学校は通常二年制なのですが、希望すればもう一年学ぶことができたので、三年目には研究生として、リアルイラストレーションの先生に教えを受けながら絵を学んでいました。この時期から、周りや先生の勧めもあり、自分の絵を公募展や二科展へ出展するようになりました。二科展では毎年入選していて、その度に母が喜んでくれました。母は小さいころから私の絵をずっと応援してくれていて、今も展示があると必ず来てくれるんです。

学校卒業後も服飾販売の仕事をしながら絵を描き続けていました。絵を描くこと以外にも、働いていた古着屋のフライヤーをデザインしましたし、お店に出入りするお客さんも個性的で素敵な人が多く、絵を描く上でいろいろな刺激になっていました。

作風の転機となったのは二〇一一年ごろ。それまで勤めていた会社を辞め、知人の紹介で古本屋で働いた時期がありました。その古本屋のオーナーが一風変わった人で、普通の本屋では扱わない、または流通しないような個性的な本がたくさん置いてあるお店でした。いろいろな本や写真集を見ては、それに関わる話をたくさん聞かせてもらいました。そんな中、ある一冊の本を目にしました。海外の子どもがたくさん載ったファッション誌のような本。そこに出ている子どもたちの様子がなぜか印象に残り、そこから現在の作風であるモノクローム調の外国の子どもを自然と描くようになりました。

二〇一三年にはずっと出展し続けてきた二科展の会友賞をいただきました。その前後で作風を変えたので、関係者から作風がガラリと変わることは珍しいと言われました。自分の絵が徐々に評価されるようになり、本格的に作家として活動をする覚悟ができたのもこのころ。そのタイミングで、出展した絵が銀座の画廊さんの目に留まったんです。

その後、徐々にギャラリーからも展示のお声掛けをいただけるようになり、グループ展や個展を開かせていただけるようになりました。地元の百貨店で個展を開いたときには、子どものころに一緒にお囃子を練習したおじさんやおばさんたちが大勢来てくれました。

現在は作家として自信もつき、応援してくれる方もいて嬉しい反面、作品たちにご縁が結ばれていくことに寂しさを覚えるときもあります。自分が気に入っている作品は近くに置いておきたいとも思うのですが、不思議とそういう作品は手元を離れていくことが多く、ある種矛盾のような気持ちにもなります。それでも絵を描くことはこれからも続けていきたいです。

故郷への想い

実家が好きなので、今は茨城町から近いところに住んでいます。

町に帰るととても落ち着くのですが、作家活動やギャラリー、美術館の多さを考えると、都内への移住も捨てがたいんです。ただ、芸術的な刺激を受けることよりも、年老いても安心して暮らせるような生活環境が大切なのかもなと思いますし、何より私にとっては町の雰囲気が合っているんだと思います。

子どものころに遊んだトミショウランドも、今では新興住宅地になっているそうで驚きました。町が発展し、移住してくる方が増える分、暮らしやすい環境が整っていくことを期待しています。個人的には、町内にいい画材屋さんができてくれるといいかなと思います（笑）。

遅野井梨絵（おそのいりえ）　画家　茨城町小鶴生まれ。
専門学校在学中にリアルイラストレーションと出会う。二科展会友賞受賞をはじめ、数々の賞に入選。
現在は新たな技法を用いた作品制作に取り組んでいる。　rie-osonoi.main.jp

古くから伝わる風習「盆綱」を紹介します

今号の特集で紹介した更科公護さん。
今から半世紀以上前に、茨城町内をはじめとした各地で
風習の聞き取りをし、たくさんの著書を残しました。
現在も町内に残る盆綱の風習について
たくさんの資料が残っています。
今号では紹介しきれなかった
更科さんが残した盆綱の話や
出版した本の数々をWEBサイトで紹介します。

From Sun –編集室から–

Sun 第9号をお届けします。
今回のSunは「文化の秋」でしたが、個人的には食欲の秋でした。最近、さつまいもの品種をいろいろ知ったので食べ比べしました。しっとり系やほくほく系など秋を満喫しました！が、ちょっと体重計に乗るのが怖いです…。［ひで③］／誰かが残さないといけないもの。先人の残してくれたものは尊く、今を生きる人に何かを示してくれていると思います。何を示してくれているのかは、いまだ分かりませんが。［KABA3］／町内を散歩していたら、林から突然、可愛らしい動物が目の前に姿を現しました。猫かな…?と思いよく見てみると、狸ではありませんか！初めての対面に驚いて、固まってしまいましたが、それは狸も同じだったよう。一瞬時が止まったかのように見つめ合いました（笑）。［243］／長く住んでいる土地でも、過去にどんなことがあったのか、調べたり記録したりはしていませんでした。祖父母や父母の話をちゃんと聞いて、次の世代につなげるようにしていきたいです。［がっきー3］／先日ある哲学者が、過去の出来事から現在のあり方を探ることは、時間を取り戻すことでもあると話していました。先人たちが残した足跡とゆるやかにつながり、それが一つの形になる。それが今号なのかもしれません。このまちの空気を、時間を超えて伝えていくもの。Sunはそんな冊子を目指していきます。［YANNA3］

紙面に載せきれなかった写真、取材のお話など、いば3オフィシャルWEBサイトにUPしています。
いば3ふるさとサポーターズクラブ オフィシャルWEBサイト　town.ibaraki.lg.jp/iba3

次号は、2020年3月発行予定です。

Sun 第9号 秋冬号　2019年12月10日発行

企画・発行：いば3ふるさとサポーターズクラブ事務局
［茨城町 町長公室 秘書広聴課］
〒311-3192 茨城県東茨城郡茨城町小堤1080
TEL：029-240-7126　MAIL：iba3@town.ibaraki.lg.jp

編集・アートディレクション・デザイン｜i,D
取材・出筆｜二川ナオミ　ホシカワリエコ　石川聖太
写真｜アラタケンジ　絵｜やまなかももこ
印刷・製本｜株式会社光和印刷

本誌内容の無断転記、記載、複写を禁じます。 ©Sun all rights reserved.

参考文献
・旧川根村における狐火の研究｜更科公護　・慈雲寺沿革｜更科公護
・茨城こども歳時記 春夏編／秋冬編｜更科公護
・茨城町史 地誌編｜茨城町史編さん委員会

Special Thanks［順不同］
茨城町教育委員会　茨城町の歴史を語る会　茨城民俗学会　さらしな堂
東急百貨店　美岳画廊　斎藤沙也佳さん

“いば3”ではサポーターを募集しています!!

“いば3ふるさとサポーターズクラブ”は
いばらきまちがつくるあたらしくて
ゆるやかなつながりの場。
設立から3年目を迎え、
会員数は800名を突破!
ますます盛り上がる“いば3”と
みんなでつながろう!!!

お申し込みはこちらから
town.ibaraki.lg.jp/iba3

いば3 WEBサイト
茨城町プロモーションビデオ“つながりとひと”

連載

マチのケシキ

第9回　火の見櫓と一反木綿

絵｜やまなかももこ　文｜石川聖太

澄みきった空気の初冬。見上げた空もより一段と高く感じるようになりました。近所を散歩していると、空にグン！と伸びる火の見櫓（やぐら）がありました。

火の見櫓の起源は江戸時代といわれ、火事になると櫓上の番人が半鐘と呼ばれる鐘を打ち鳴らし、火消しや町の人に火事の発生を知らせる、今でいう地域の防災拠点のようなもので、江戸時代から昭和初期にかけて全国的に広がりました。その後、一一九番や防災無線などの発達と共にその役目を終え老朽化のため撤去されるなど、徐々にその姿を消しつつあります。現存するものでは戦前から建っている櫓もあるそうです。

茨城町内でも以前は各地区に建っていましたが、だんだんと見かける機会も少なくなってきました。

幼いころ近所に櫓があり、下から櫓を見上げては上から見た景色はどんな風なのかな、いつか登ってみたいなと思っていました。ある日、消火用のホースが櫓の上から一反木綿のようにぶらぶらと下がる様子を見かけ、近くにいた大人に登ってみたい！と声をかけたこともありました。その後櫓は撤去され、登ることは叶いませんでしたが、火の見櫓を見かけると、風にぶらぶらと揺れる一反木綿が目に浮かびます。みなさんは普段の暮らしの中で、ふと思い出すマチのケシキはどんなものでしょうか。

櫓の上からの眺めを想像することは
非日常への漠然とした憧れなのかもしれません。

絵：やまなかももこ
画家。絵本作家。女子美術大学卒。
絵本や挿絵を中心に創作活動を行っている。
主な作品に「田んぼのいのち」（くもん出版）、
「俵万智3・11短歌集 あれから」（今人舎）など。
momokomo.net

Sun

茨城町は 北緯36度17分 東経140度25分
茨城県のほぼ中央部に位置します
日本有数の汽水湖である涸沼を湛え
豊富な水と里山に育まれた風土です

Sun 第九号 二〇一九年十二月十日発行 企画・発行 いばさふるさとサポーターズクラブ事務局 iba3@town.ibaraki.lg.jp TEL 029-240-7126